

ネパール諸写本対比による

大乘莊嚴經論の原典考

——第一章、第二章、第三章を中心として——

舟 橋 尚 哉

私は先に「大乘莊嚴經論のネパール諸写本の同異と

Levi 本の原本の推定」を発表したが、その中で Levi 本の原本は Zs 本（または Zs 本からの転写本）であることが明らかになったかと思う。この小論文ではその成果を踏まえて大乘莊嚴經論の第一章、第二章、第三章の諸問題を考察してみようと思う。

さて第一章の第一偈の長行の欠字については、すでに印仏学会で発表したのここでは論じないが、ただこの欠字の位置が Zs 本を Levi 本の原本と推定する重要な根拠ともいえるので、一応結論だけを述べると、Levi 本や Zs 本や A 本などでは欠字が…で表わされている。し

かるに Zs 本ではそれらの欠字がすべて右端に相当し、空白になっており、写本の右端が剝離したのではないかと思われる。

しかも Zs 本の書写年代はネパール暦七九八年であるから、西暦一六七八年（または一六七七年）に相当し、現存の大乘莊嚴經論の写本の中では最も古い写本である。これらより考えて、Zs 本こそは現存の大乘莊嚴經論の写本中、最も信頼できる写本であり、Levi もこの写本を原本としたか、あるいは Zs 本からの転写本を原本としたと考えられる。

Zs 本はこのように大乘莊嚴經論の写本としては最古のものであり、重要な写本であるが、古字が多く使われており、あまり鮮明でないため読みにくいところもある。

そこでNs本を正確に読むためにはNo本が必要となる。そしてこれらのNo本、Ns本はそれぞれ大谷探検本No.本の書写年代はネパール暦一〇二六年であるから、^⑦のA本、B本の原本であると考えられるので、武内紹晃西暦一九〇六年(または一九〇五年)であり、おそらくNo.教授のLevi本と大谷探検本のA、B、並びにチベット本はNs本から直接転写されたものであろう。これらの^⑧訳、漢訳との対照表に従って、私もLevi本、Ns本、写本はいずれも、もとはBir Libraryにあったものと考え、No.本と漢訳との対照表を示すことにする。

【Levi本】

p. 1~p. 8, 1, 17 mahāyānasiddhyadhikārah prathamah(第一章).....

【Ns本】

【No本】

【漢訳】

p. 8~p. 10, 1, 5 śāraṇagamanādhikāro dvitīyah(第二章).....1b, 1, 1~7b, 1, 2.....1b, 1, 1~6a, 1, 9.....縁起品・成宗品

p. 10~p. 13, 1, 17 gotrādhikāras tīrtīyah(第三章).....7b, 1, 2~10b, 1, 3.....6a, 1, 9~9a, 1, 1.....帰依品

p. 13~p. 19, 1, 9 citotpādādhikāras caturthah(第四章).....10b, 1, 3~13a, 1, 4.....9a, 1, 1~11a, 1, 5.....種性品

p. 19~p. 22, 1, 10 pratīpattīyadhikārah pañcamah(第五章).....13a, 1, 4~18a, 1, 3.....11a, 1, 5~15a, 1, 7.....発心品

p. 22~p. 24, 1, 27 tatvādhikārah ṣaṣṭhah(第六章).....18a, 1, 3~20b, 1, 2.....15a, 1, 7~17a, 1, 9.....二利品

p. 25~p. 27, 1, 17 prabhavādhikārah saptamah(第七章).....20b, 1, 2~23a, 1, 2.....17a, 1, 9~19a, 1, 8.....真実品

-23a, l. 2~25a, l. 2.....19a, l. 8~21a, l. 3.....神通品
- p. 27~p. 33, l. 11 paripākādhikāro 'śītamah(第八章).....
-25a, l. 2~30a, l. 1.....21a, l. 3~25a, l. 1.....成熟品
- p. 33~p. 49, l. 24 bodhyadhikāro navamah(第九章).....
-30a, l. 2~42a, l. 1.....25a, l. 1~35a, l. 3.....菩提品
- p. 50~p. 53, l. 12 adhimuktyadhikāro dasamah(第十章).....
-42a, l. 1~44a, l. 6.....35a, l. 4~37a, l. 2.....明信品
- p. 53~p. 76, l. 26 dharmaparyeṣiyadhikāra ekādaśaḥ(第十一章).....
-44a, l. 6~64a, l. 2.....37a, l. 2~52a, l. 7.....求求品
- p. 77~p. 84, l. 12 deśanādhikāro dvādaśaḥ(第十二章).....
-64a, l. 2~70a, l. 6.....52a, l. 7~57a, l. 8.....弘法品
- p. 84~p. 90, l. 4 pratipatyadhikāras trayodaśaḥ(第十三章).....
-70a, l. 6~74a, l. 4.....57a, l. 8~60b, l. 3.....隨修品
- p. 90~p. 97, l. 17 avavādānuśāsanayadhikāraś caturdaśaḥ(第十四章).....
-74a, l. 5~79a, l. 2.....60b, l. 3~66a, l. 2.....教授品
- p. 97~p. 98, l. 17 upāyasahitakarmādhikāraḥ pañcadaśaḥ(第十五章).....
-79a, l. 2~79b, l. 3.....66a, l. 2~66b, l. 4.....業伴品
- p. 98 ~p. 117, l. 22 pāramitādhikāraḥ samāptah(第十六章).....
-79b, l. 3~90a, l. 3.....66b, l. 4~80b, l. 5.....度撰品
- p. 118~p. 132, l. 3 pūjāsevā 'pramāṇādhikāraḥ samāptah(第十七章).....
-90a, l. 4~98b, l. 2.....80b, l. 5~89b, l. 9.....供養品・親近品・梵住品

p. 132~p. 160, l. 10 bodhipakṣadhikārah samāptah(第十八章)……………

……98b, l. 2~115b, l. 7 ……89b, l. 9~108a, l. 4 ……覚分品

p. 160~p. 175, l. 17 guṇadhikārah samāptah(第十九章)……………

……116a, l. 1~124a, l. 5……108a, l. 4~117b, l. 7……功德品

p. 175~p. 189, l. 4 caryāpratiśhadhikāro nāmaikāvimsatitamo 'dhikārah(第二十章・第二十一章)……………

……124a, l. 5~132a, l. 4 ……117b, l. 7~126b, l. 7……行住品・敬佛品

二

その他のネパール写本としては^⑨N_A本、N_B本があり、

もうひとつは Hem Raj Collection にあったものと考えられる。

そして National Archives, Nepal から取り寄せた

写本中、私の持っている National Archives の目録に

は載っていない写本があるので、これを N_X本と名付け

ることにする。

その他に高岡目録 A. 179 の N_P本、New York の

N_B本などがある。これらのネパール諸写本はいずれも

N_S本がもとで、それから次々と転写されたものと考え

られる。勿論、Levi も N_S本かそれからの転写本を見

ているにちがいない。これらの写本がどのように転写さ

れたかについては、近く宗教学会で発表する予定である

ので、ここでは論じない。

さて大乘莊嚴經論の原典を、ネパール諸写本を用いる

ことよって考察してみようと思う。先にも述べる如く、

第一章第一偈の長行の三ヶ所の欠字については、^⑩印仏学

会ですでに発表したもので、ここでは論じないが、ただ

Levi 本 p. 1, l. 11 の最後は duṅkhasyottaraṅgāya と

なっていて、その後は l. 12 の duṅkhitajane とつづ

ている。しかし N_S本 (lb, l. 4) 並びに N_X本 (lb, l. 7)

では空白または…(点線)となっている。(それ以外の写本

ではそのまま間をあげずにつづけている。)この欠字について

は、今まで誰も言及した人はないと思うが、私はチン

ト訳 gaṇ las と N_S本 (lb, l. 5) の初めが dduṅkhitajane

と読めるところから、lb, l. 4 の最後は kasmād (sg. Ab)

kena, kasmāi の次の語であり kasya, kasmīn の前の

語であるから、この点でも kasmād が最適である。

次に第一章第四偈の r は Lévi 本では rtho na ca jāyehāh となっているが、長尾博士はチャット訳によって rthataś ca jāyehāh と訂正されている。そして Bagchi 本もそれに従っている。しかしこの偈は Ārya 調の偈であるから、長尾博士の訂正や Bagchi 本のままで

dharmadvayavyavasthā vyañjanato rthataś ca

jāyehāh || 4 ||

——U—U———U—U———U———

となり、第六韻脚が短音となるという規定と一致しないばかりか、第五韻脚も一マートル不足してしまう。

そこで Ns 本 (2b, l. 4) を見る。rtho na ca ca rthena ca と読める。Nc 本 (2a, l. 8) も Ns 本と似ているが、rthena ca のように見える。N_B 本は rthena ca (2b, l. 2) と正しく読んでくる。これなら

dharmadvayavyavasthā vyañjanato rthena ca jā-

yāh || 4 ||

——U—U———U—U———U———

となり、27 マートルで第六韻脚が短母音であるという規

定とも合致している。

また第四偈も Lévi 本の yathausadhān tadvat (U—U—U———) のみではシラブルが合わならない。全体で 28 マートルでは 2 マートル不足する。ここは Nagao Index も Bagchi 本も、いずれも訂正はない。しかし Ns 本 (2b, l. 3) はやや不鮮明であるが、(ya) dva-dausadhāt tadvat かと思われる。Nc 本 (2a, l. 8) は yadvadausadhāntadvāt と読める。B 本 (2b, l. 5) は yadvadausadhāntadvāt と読める。これなら

aghrāyamañakatukam svādurasam yadvadausa-

dhān tadvat |

——U—U—U—U———U—U———U—U—

となり、30 マートルで Ārya 調の規定と一致するから、このように訂正すべきであると思つた。

次に Lévi 本 p. 3, l. 7 の第一章第七偈の長行の antarāyī であるが、Lévi も脚註で「もしこのテキストが正しければこれは新しい語である」とらっているようにこの語についてやや疑問を持っておられる。Nagao Index も Lévi 本を正しいものとして antarāyīn (p. 20, l. 19) として索引に載せている。しかし Ns 本を見ると

やや不鮮明ではあるが、*antarāyikas* (3a, 1, 2) と読める。
Nc 本 (2b, 1, 5) A 本 (3a, 1, 4) B 本 (3a, 1, 5) では (anta)
rayikas となつてゐる。anta が欠けてゐるが、後は正
しく書写されてゐる。従つて、これは *antarāyī* を *anta-*
rayikas (または *antarāyikas*) と訂正する方がよごと
思ふ。チベット訳 *bar chad byed ba* ともほぼ一致する。

次に第一章第十一偈の長行であるが、Lévi 本 p. 5, 1.
7 では *vilomayatyathaiva* とある。しかし Lévi は脚
註に Ms. では *virrodhaty* とつてゐるから、Ns 本
(4b, 1, 5) はやや不鮮明ではあるが、*virrodhatyesaiva* と読
める。しかし Nc 本 (4a, 1, 3) や A 本 (5a, 1, 3) や B 本
(5a, 1, 7) では *virrodhatyesaiva* と明瞭に読めるから、こ
のように訂正すべきであらう。チベット訳 *mi hgal* と
も一致するし、*esa eva* に相当する *hdi kho na* とつて
語もある。意味内容からいつてもこれでよいと思ふ。

三

次の第二章は法法性分別論が混入した個所として有名
であるが、逆にいえばその分だけ大乘莊嚴經論の梵本が
欠けていることになる。最近、法法性分別論の *Vairo-*
canarakṣita の梵本の註釈が現存することが、Gokhale

によつて発表され、Leslie Kawamura によつてその内
容の一部が公開された。¹⁰⁾ *Kāraṇasūtra* (1977, pp. 36-47)

さて第二章第一偈 a の *saraṇapragato 'tra yāne* は
saraṇam pragato 'grayāne に訂正すべきであらう。な
ぜなら、Ns 本に *saraṇam pragato 'grayāne* (7b, 1, 2-
1, 3) とあるし、Nc 本 (6a, 1, 9) A 本 (8a, 1, 6) B 本
(8b, 1, 5) も同様である。チベット訳にも *theḡ pa mchog*
phyir とあるから、*agrāyāne* と読むべきであらう。
saraṇa や *saraṇam* と訂正するにしろ、第一偈 b
の *saraṇa* を *saraṇam* と訂正するときのようなシラフ
の問題はない。しかし各写本が一致して *saraṇam* と
ある点や、前後の関係からしても *saraṇam* の方がよ
ごと思ふ。

第二偈直前には脱落や訂正すべき点がある。印仏学会
の発表の資料として一応提示したが、発表の時間がなく、
また印仏の原稿にも載せるスペースがなかったので、こ
こで改めて論ずることにする。すなわち、第二偈の直前
の Lévi 本には大きな誤まりがあるので、この点につい
て述べよう。このことについては、Lévi の仏訳テキスト
にも Nagao Index も宇井博士も、Bagechi 本もいずれ
も訂正はなかつた。Gokhale, *Pragatyaṇa* (1977, pp. 36-47)

Lévi 本 p. 9, 1. 2 に於て *tathāpyatra śaraṇapragatānām* とある。この *atra* は Ns 本 (7b, 1. 5) 〃 Nc 本 (6b, 1. 3) 〃 A 本 (8b, 1. 2) 〃 B 本 (8b, 1. 9) 〃 N_B 本 (7b, 1. 2) などすべし *agra* となつてゐる。チベット訳(北京版、デッケ版)も *mchog* とあるから、Sk. *agra* に相当する。

更に *śaraṇapragatānām* の *pragatānām* は Ns 本 (7b, 1. 5) はやや不明瞭に *yaśanānām* のやうにも見えるが、*gamanānām* とある。Nc 本 (6b, 1. 3) 〃 *tama-nānām* か *gamanānām* とある。A 本 (8b, 1. 2) は *tama-nānām* とあるが、B 本 (8b, 1. 9) 〃 N_B 本 (7b, 1. 2) 〃 N_X 本 (9a, 1. 6) 〃 すべし *gamanānām* と読んでゐる。チベット訳も *skyaabs su ḥgro ba* とあるから、ここは *śaraṇagamānānām* に訂正すべきである。その直後の長行の Lévi 本には脱落があるように思われる。すなわち Lévi 本 p. 9, 1. 2 の最後は *kecinotsahante* となつてゐる。すべし *Bagchi* 本 (p. 9, 1. 9) 〃 せよれに随つてゐる。Ns 本 (7b, 1. 5) に於ては *kecinotsahante* の後に *iti śaraṇagamana protsāhane* とする文が入つてゐる。この *iti* は Nc 本 (6b, 1. 4) 〃 A 本 (8b, 1. 3) 〃 B 本 (9a, 1. 1) 〃 N_B 本 (7b, 1. 2) 〃 N_X 本 (9a, 1. 6) など *iti* によつて確認される。チベット訳を見れば *kha cig mi spro*

bas の後に *skyaabs su ḥgro bar spro* *bar bya bahi phyir* (北京版 85—5) 〃 デッケ版 134b, 1. 2) とする文が入つてゐるから、やはり *iti śaraṇagamana protsāhane* を補うべきであろう。

さて法法性分別論の混入部分は二葉分(計四面)であると考えられるが、なぜこのような混入が起つたのであろうか。従来からいわれてゐるやうに、大乘莊嚴經論と法法性分別論との思想的類似性にもとづくことは、いままでもないが、私は法法性分別論の初めの個所が (a) *bhyupagamanaṃ* と写されてゐることも注意したい。(この写し方が間違つてゐることにについては後で述べる)。

大乘莊嚴經論の第二章第一偈とその長行には *abhyupagama* (Tib. *khass len pa 58-5-2, 58-5-4*) とする語が見出される。第四偈はサンスクリットが欠けているが、チベット訳 (*khass len pa 59-1-3, 59-1-4*) より見て *abhyupagama* とあるかと推定される。

ところで法法性分別論の混入個所も (a) *bhyupagamaanam* とあり類似してゐることが、混入の原因となつたのではないかと思われるが、しかしこの個所は Ns 本 (8a, 1. 2) を見ると *tūpagamanam* または *bhūpagamanam* と読める。Nc 本 (6b, 1. 8) 〃 *tūpagamanam* か

bhūpagamānam である。A本(8b, 1, 7)は bhūpaga-
 manam のようであり、B本(9a, 1, 6)は bhūpaga-
 nam である。しかし私は法法性分別論のこの個所をチ
 ベット語からサンスクリット原本を想定するに、(de) pi
 dehi bdaḡ nid du ne bar son pa shes brijod do 一は
 tadātmakatvena tūpagamānam ity ucyate と推定さ
 れる。それ故、法法性分別論の混入個所の初めの部分は、
 (a) bhūpagamānam ではなく tūpagamānam であ
 ると考える方がよいと思う。なぜなら、チベット訳 ne
 bar son pa も upagamāna と一致しているからである。
 次に法法性分別論の混入個所の最後の部分から大乘莊
 嚴經論第十一偈の長行に移るところも、asāṃketikam
 (Lévi 本、p. 9, 1, 19)となつてゐるが、チベット訳 brdar
 btags (デルゲ版)から見ても sāṃketikam でよいと思
 われ、漢訳でも否定の語は入っていない。従つてこの
 a は余分であるが、思うにここは法法性分別論の途中で
 あるから、法法性分別論の brtag tu med pa (a-nir-
 nya) の a が混入したものとされる。そう考えない
 と、ここに a の否定詞が入ったことは説明できないと
 思う。

次に第二章最後の第十二偈の長行でも、Lévi 本、p.

10, 1, 4 に mahāryādisām とあるが、Nagao Index
 の Bagchi 本も訂正はなす。しかしNs本(10b, 1, 2-1,
 3)を見ると mahāryā□nān とある。実は□は 1, 3 の
 最後にもあり、一見 dr のようにも見える。そして ra
 が sā と似ているから、Lévi は mahāryādisām と読
 んだのであろう。しかしNc本(8b, 1, 9-9a, 1, 1)もA本
 (11b, 1, 6)もNa本(8a, 1, 5)、Nb本(10a, 1, 5)も ma-
 hāryāṇām と読み、チベット訳の iphags pa chen po
 (mahārya) であるから、ここは mahāryāṇām と訂正
 した方がよいと思う。ただB本(12a, 1, 6)は mahār-
 yādisān とあり、Nx本は mahāryādrinān と読めるが、
 これはNs本を直接または間接に写したからであらうが、
 Ns本そのものは mahāryāṇām の方がよいと思われる
 から、やはり訂正する方がよいと思う。

四

次の第三章種性品では訂正すべき点はそれほど多くな
 いが、二、三の点について述べよう。

まず初めに Lévi 本 p. 11, 1, 6-1, 7 第三偈の長行に
 tathodāgrāni とあるが、Ns本(11a, 1, 5)もNc本(9b,
 1, 2)もA本(12b, 1, 2)もB本(13a, 1, 1)も tathotta-

ptāni となっている。チベット訳も sbyaṅs pa であるから uttapta と一致する。従ってこの Nagao Index の Bagchi 本も宇井博士もいずれも訂正はないが、tathodagrāni は tathottaptāni と訂正すべきであらう。

次に Lévi 本 p. 12, l. 19 の第十偈の長行の ca bahusavva ㊦ Ns 本 (12b, l. 1) ㊦ Nc 本 (10b, l. 2) ㊦ A 本 (13b, l. 7) ㊦ B 本 (14a, l. 9) のごちれ㊦ ca nantasatva とあるのりか㊦ ca nantasatva ではなくて cānantasatva と訂正する方がよいと思う。なぜなら、チベット訳も mthah yas pa (Sk. ananta) となっているし、漢訳も「無辺衆生」となっているからである。

次に第二偈直前の anena gotrastivavibhage slokaṅ ㊦ anena であるが、Ns 本、Nc 本、A 本、B 本、N_a 本、N_b 本、N_x 本のいずれも anena はない。チベット訳にもこの anena に相当する語はないから、もともとこの anena が何かの間違いから、(多分第一偈直後の anena gotrasāstiva ㊦ anena との混乱からと思われるが) 挿入されたのではなからうか。

以上、大乘莊嚴經論の第一章、第二章、第三章の原典を中心に若干の考察を加えたが、最後に Ns 本、Nc 本などのネパール諸写本によって Lévi 本の校訂を試みた

ので、『ネパール諸写本による大乘莊嚴經論の校訂テキスト』を、第一章の初めより余白の許すかぎり載せることにする。(昭和五十八年九月十二日脱稿)

註

- ① 印仏学会(高野山大)にて発表(印仏研究第三十二卷所載予定)
- ② Ns 本は National Archives, Nepal. Bṛhatsuciapatram II No. 291.
- ③ 印仏学会(高野山大)昭和58年6月11日発表。
- ④ Nc 本は National Archives, Nepal. Bṛhatsuciapatram II No. 20.
- ⑤ 現在ネパールではウィクラム暦を国暦としている。しかし古くから使われていたネパール暦は現在でも使われており、今年西暦一九八三年はネパール暦一一〇三年に相当する。ただしネパール暦は月暦で教へ、十一月頃の新月より年度が変わるようである。従って今年の十一月より一一〇四年に入る。(高岡秀暢氏より御教示を得た)。
- ⑥ Buddhist Manuscripts of the Brit Library (大正大学研究紀要第四十輯)昭30年、七〇頁の No. 152 と合致している。
- ⑦ A 本の原本は Nc 本であり、B 本の原本は Ns 本または Ns 本からの転写本であると思われるが、これらについては宗教学会(大正大学)で発表。
- ⑧ 武内紹晃教授「大谷探検隊招來の『大乘莊嚴經論』について」(龍谷大学論集第三五二号昭31年)。

- ⑨ National Archives, Nepal. Suciapatram (Baudhdharsana-viśaya) I No. 202. (N_A本) / No. 201 (N_B本) 参照。
- ⑩ 長尾博士「カトマンドゥの仏教写本典籍」(岩井博士古稀記念典籍論集) 昭38年' p. 17. Hem Raj Collection No. 27 と合致する。
- ⑪ この目録は高野山大学教員、氏家寛勝氏にちよび、おなじやれたものじゆん。 *Katmandu Buddhist Manuscripts in Nepal*
- ⑫ H. Takaoka: A Microfilm Catalogue of the Buddhist Manuscripts in Nepal. 1981.
- ⑬ Buddhist Sanskrit Manuscripts, New York 1975. No. MBB-1-83.
- ⑭ 宗教学会(大正大学)58年10月、但し宗教学会で発表しなな部分は別の機会に発表する予定。
- ⑮ 印仏学会(高野山大学)昭58年6月。
- ⑯ Nx 本は National Archives, Nepal から取り寄せた写本の1つじゆんが、おなじやわけか、私の特っている目録には載ってこな。二五一葉じゆんが、27a 以下8行で書かれてくる。No. 101 (visam 101) とある。
- ⑰ Lévi: Mahāyānasūtrālamkāra Tome 1 p. 3 脚註③参照。
- ⑱ Gokhale: Yogācāra works annotated by Vairocana-rakṣita, *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* vols LVIII~LIX (1977-1978) Poona 1978.
- ⑳ Leslie Kawamura: Dharmadharma-tā-vibhāga: A Preliminary Study (印仏学会、岩崎日本大学)
- ㉑ この訂正(第一欄の)は Bagchi 本 (P. 9, l. 3) とおなじが、第一欄の訂正はな。
- ㉒ 印仏学会(高野山大)べ、私が配布した資料参照。

ネパール諸写本対比による大乘莊嚴經論の校訂テキスト 第1章〔未完〕

凡例 * Sandhi および単語の綴り等については写本を尊重し、正規形には改めずにおく。例えば sattva→satva,

—nād yady→—nāt yady, —m | →—m |

* イタリツクの文字(偶類は下線)は Lévi 本と異なり訂正したもの、この場合訂正の根拠を註に示した。

* *印はこのままではやや疑問もあるが、未訂正のもの。

* Lévi 本, Bagchi 本の頁数並びに Ns 本, Nc 本の葉数を表示した。

* Lévi 本の誤植と思われるものについては、主な写本のみ表示した。

【主な略記号】

- L. = S. Lévi : Mahāyāna-sūtrālamkāra 1907
 Ba. = Bagchi : Mahāyāna-sūtrālamkāra 1970
 Ns. = National Archives, Nepal, II No. 291
 Nc. = National Archives, Nepal, II No. 20
 A. = 大谷探検本, A本
 B. = 大谷探検本, B本
 N_B. = National Archives, Nepal, Baudhdarśanaviśaya I No. 201
 N_A. = National Archives, Nepal, Baudhdarśanaviśaya I No. 202
 Nx. = National Archives の目録に於て字本？
 Nagao. = Nagao : Index to the Mahāyāna-sūtrālamkāra I 1958
 Ui. = 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」1961

MAHĀYĀNASŪTRĀLAMKĀRA

|| OM ||

- L p. 1 (Ns 1b) namaḥ sarva-buddha-bodhisattvebhyaḥ
 Ba p. 1 [Nc 1b]

artha-jño 'rtha-vibhāvanāṃ prakurute vācā padaiś cāmalair
duḥkhasyōttaraṇāya duḥkhita-jane kārūyatas tan-mayaḥ |
dharmasyōttama-yāna-deśita-vidheḥ satveṣu tad-gāmiṣu

śiṣṭām-artha-gatiṃ niruttara-gatāṃ pañcātmikāṃ darsayan || I I

artha-jño 'rtha-vibhāvanāṃ prakurute ¹⁾ [*ty-ādā*] kopaśeṣam ārabhya ko 'lamkaroti | artha-jñah |
 kam alamkāram alamkaroti | artha-vibhāvanāṃ kurute | kena vācā padaiś cāmalaiḥ | amalayā vā-
 cēti [*paunādikayā*] ³⁾ amalaiḥ padair iti yuktaiḥ sahitar iti vistarah | na hi vinā vācā pada-vyañja-
 nair artho vibhāvayitum śakyata iti | kasmai duḥkhasyōttaraṇāya [*kaśmādā*] ⁴⁾ duḥkhita-jane kārūṇ-

yatas tan-mayaḥ | duḥkhita-jane yat-kāruṇyaṃ tasmāt kāruṇyataḥ | tan-maya iti kāruṇya-mayaḥ |
kasyālaṃkāraṃ karoti | dharmasyōttama-yāna-desīta-vidheḥ | uttama-yānasya deśīto vidhir yasmin
dharṃe tasya dharmasya | kasmīn alaṃkaroti | satvesu tad-gāmiṣu | nimitta-saptamy eṣā mahā-
yāna-(Ns 2a)gāmi-satva-nimittam ity arthaḥ | kati-vidham alaṃkāraṃ karoti | pañca-vidham | śli-
ṣtām artha-gatiṃ niruttara-gatāṃ pañcātmikāṃ darsayan | śliṣtām iti yuktāṃ niruttara-gatām ity
anuttara-jñāna-gatāṃ |

tām idāniṃ pañcātmikāṃ artha-gatiṃ dvitīyena ślokena darsayati |
gḥāḥitam iya suvarṇaṃ vārijaṃ vā vibuddhaṃ
sukṛtam iya subhojyaṃ bhujyamānaṃ kṣudhārtaiḥ |
vidita iya sulekho ra [Nc 2a]tṇa-peḷēva mukṭā
vivṛta iha sa dharmah pṛiṭim agryaṃ dadhāti || I 2

anena ślokena pañcabhir dṛṣṭāntaiḥ sa hi dharmah pañca-vidhamartham adhikṛtya deśitah sā-
dhyam vyūtpādyaṃ cintyaṃ acintyaṃ parinispannaṃ cādhiḡamārthaṃ pratyātma-vedanīyaṃ
bodhi-pakṣa-svabhāvaṃ | so 'nena sūtrālaṃkāreṇa vivṛtaḥ pṛiṭim agryaṃ dadhāti | yathā-kramaṃ
ghaṭita-suvarṇādivat |

yadā sa dharmah prakṛtyāiva guṇa-yuktaḥ kathaṃ so 'laṃkṛiyata ity asya codyasya parihārārthaṃ
tṛiṭiyah ślokaḥ |

yathā bimbaṃ bhūṣā-prakṛti-guṇavadvarpaṇa-gatam
viśiṣṭam pramodyam janayati nṛṇāṃ darsana-vasāt |
tathā dharmah sūkta-prakṛti-guṇa-yukto 'pi satatam
vibhaktārthas tuṣṭim (Ns 2b) janayati viśiṣṭam iha satāṃ || I 3

anena kiṃ darsayati | yathā bimbaṃ bhūṣayā prakṛtyāiva guṇavat ādarsa-gatam darsana-vasād
viśiṣṭam pramodyam janayaty evaṃ sa dharmah subhasitaiḥ prakṛtyāiva guṇa-yukto 'pi satatam
vibhaktārthas tuṣṭim viśiṣṭam janayati | buddhi-matām atas tuṣṭi-viśeṣōpādānād alaṃkṛta iva

bhavattī |

ataḥ param tribhñ ślokais tasmīn dharme trivividham anuśaṃsaṃ darsāyaty ādarōtpadanārtham |

āghrāyamaṇa-katūkam svādu-rasaṃ yadvad auśadham tadvat |⁷⁾

dharma-dvaya-vyavassthā vyañjanato 'rthena ca jñeyah | I 4

rājēva durārādho dharmo 'yaṃ vipula-gādha-gambhīrah |

ārādhitās ca tadvad vara-guṇa-dhana-dāyako bhavati || I 5

ratnaṃ jātyam anarghan⁹⁾ yathā 'parīkṣaka-janaṃ na toṣayati |

dharmas ta[Nc 2b]thāyam abudhan¹⁰⁾ viparyayāt toṣayati tadvat || I 6

Ba. p. 3
L. p. 3
trivido 'nuśaṃsah | avaraṇa-prahaṇa-hetutvam auśadhōpamatvena | dvaya-vyavastha iti vyañja-
nārtha-vyavasthah | vibhūtvā-hetutvam abhijñādi-vaīśeṣika-guṇāīsvarya-dānād rājōpamatvena | ār-

ya-dhanōpabhoga-hetutvam ca *anargha*-jātya-ratnōpamatvena | parīkṣaka-jana ārya-jano veditavyah

| [以上緣起品] (Ns 3a)
[以下成宗品]

nāivēdaṃ mahāyānaṃ buddha-vacanaṃ kutas tasyāyān anuśaṃso bhaviṣyatyītra vipratīpannās
tasya buddha-vacanaṭva-prasādanārtham kāraṇa-vibhājyam ārabhya ślokaḥ |¹¹⁾

ādāv-avyākaraṇāt sama-pravṛtter agocarāt siddheḥ |

bhāvābhāve 'bhāvāt pratīpakṣatvād rūtānyatvāt || I 7

ādāv-avyākaraṇāt yady etat saddharmamānī¹²⁾vyākyās paścāt kenāpy utpāditaṃ | kasmād ādau bha-
gavatā na vyākṛitam anāgata-bhayavat | sama-pravṛtteḥ sama-kālaṃ ca śrāvaka-yānena mahā-
yānasya pravṛtīr upalabhyate na paścād iti katham asyābuddha-vacanaṭvaṃ vijñāyate | ago-
carān nāyam evaṃ udāro gambhīraś ca dharmas tārīkikāṇaṃ gocoraḥ | tīrthika-śāstreṣu tat-pa-
kāraṇupalambhād iti | nāyam anyayr bhāṣīto yujyate | ucyamāne 'pi tad-anadhīmukteḥ | siddher
athānyenābhisaṃbuddhya bhāṣītaḥ | siddham asya buddha-vacanaṭvaṃ | sa eva buddho yo 'bhisaṃ-

buddhya evaṃ bhāṣate | bhāvābhāve 'bhāvād yadi mahā-yānaṃ kiṃcid asti tasya *bhāṣe* ¹⁵⁾ siddham idam buddha-vacanam ato 'nyasya mahā-yānasyābhāvāt | atha nāsti tasyābhāve śrāvaka-yāna-syāpy abhāvāt | [Nc 3a] śrāvaka-yānaṃ buddha-vacanam na mahā-yānaṃ iti na yujyate (Ns 3b) vinā buddha-yānena buddhānāṃ anutpādāt | pratipakṣatvāt | bhāvya mānaṃ ca mahā-yānaṃ sa-
rva-nirvikalpa-jñānaśrīyatvena kleśānaṃ pratīpakṣo bhavati tasmād buddha-vacanam | rutānya-
tvāt | na cāśya yathā-rutam arthas tasmān na yathā-rutārthānusareṇēdam abuddha-vacanaṃ ve-
ditavyam |

yad uktam ādāv avyākaraṇād ity anābhogād etad anāgataṃ bhagavatā na vyākitam .iti kasyacit syād ata upekṣāyā ayoge ślokaḥ |

pratyakṣa-caḥṣuso buddhāḥ śāsanaśya ca rakṣakāḥ |

adhvarṇy anāvṛta-jñānā upekṣāto na yujyate || I 8

L p. 4 anena kiṃ darśayati | tribhūḥ karaṇair anāgatasya mahataḥ śāsanōpadravasyōpekṣā na yujyate | buddhānaṃ ayatnato jñāna-pravṛtteḥ pratyakṣa-caḥṣuskatayā śāsana-rakṣāyās ca yatnavatvāt | anāgata-jñāna-sāmarthyac ca sarva-kālāvyanāta-jñānatayēti |
yad uktam bhāvābhāve 'bhāvād iti | etad eva śrāvaka-yānaṃ mahā-yānaṃ etenāiva mahā-bodhi-
prāptir iti kasyacit syād atah śrāvaka-yānasya mahā-yānatvāyoge ślokaḥ |

vaikalpyato virodhād anupāyatvāt tathāpy anupadeśāt |

na śrāvaka-yānaṃ idam bhavati mahā-yāna-dharmākhyam || I 9

vaikalpyāt parārthō(Ns 4a)padēsasya na hi śrāvaka-yāne kaścit parārtha upadiṣṭaḥ śrāvakaṅgaṃ ātmāno nirvid-virāga-vimukti-mātrōpāyōpadeśāt | na ca svārtha eva paresūpadiṣyamānaḥ parār-
tho bhavitum arhati | virodhāt | svārthe hi paro niyujyamānaḥ svārtha eva prayujyate sa
āmana eva parini[Nc 3b]rvāṅāṛtha-prayukto 'nuttarāṃ samyak-saṃbodhim abhisam̄bhōṣyata
iti viruddham etat | na ca śrāvaka-yānenāiva cira-kālam bodhau ghaṭamāno buddho bhavitum
arhati | anupāyatvāt | anupāyo hi śrāvaka-yānaṃ buddhatvasya na cānupāyena viraṃ api pra-

vyjyamānaḥ prāṭhiam artham prāpnoti | śrīṅgād iḥa dugdham na *bhasitrāyāḥ* | athānyathāpy atro-¹⁶⁾
 padīṣtam yathā bodhisatvena prayoktavayam | tathāpy anupadeśān na śrāvaka-yānam *eva* mahā-yā-¹⁷⁾
 naṃ bhavitum arhati | na hi sa tādiśa upadeśa etasmīn upalabhyate |
 viruddham eva cānyonyam śrāvaka-yānaṃ mahā-yānaṃ cēty anyonya-virodhe ślokaḥ |

āśayasyōpadeśasya prayogasya virodhatāḥ |

upastambhasya kālasya yat hinam hinam eva tat || I 10

註

- 1) L. prakurute (Lの仏訳 prakurute) Ba. prakurute Ns. prakurute (or prakuruta) Nc. prakurute A. prakurute
 B. prekūrute? N_p. prakurute N_a. prakurute N_x. prakuruta
 * 文法的には prakuruta の方がよいと思う。
- 2) L.-(Lの仏訳 ityādi) Ba....[ityādi] Ns. 空白 Nc.---- A.--- B. 欠 (-rute kopa-) N_p. mahāyānō N_a. mahā-
 yānō N_x--
- 3) L. pa---(Lの仏訳 paurādīnā or paurādīkayā) Ba....[pauryādīnā] Ns. pau 空白 yā | (pau は po とも読める) Nc.
 pau---yā | (pau は pe とも読める) A. pau--yā || (pau は pe とも読める) B. yayā N_p. pada amalayā N_a. pada
 amalayā N_x. pe--yā || Nagao. pauryādīnā.
- 4) L. Ba. 欠字に気がつかず ottaraṅāya duḥkhita とある。Ns. 空白 (-) Nc. ottaraṅāya • duḥkhita A. ottaraṅāya •
 duḥkhita B. ottaraṅāya duḥkhita N_p. ottaraṅāya | duḥkhita N_a. ottaraṅāya || duḥkhita N_x-- Tib. gañ las
- 5) L.--- Ba....[mahāyāna] Ns. ma 空白 (---) Nc. mahāyāna A. mahāyāna B. ma [gāmi] N_p. mahāyāna
 N_a. mahāyāna N_x. ma---- Nagao. mahāyāna
- 6) L. jāna Ba. yāna Ns. jāna? Nc. jāna A. jāna B. jāna N_p. jāna N_a. jāna N_x. jāna Nagao.
 yāna (Tib) Tib. theg pa (yāna)
- 7) L. yathausadham Ba. yathausadham Ns. (ya) dvadausadhat (ya は欄外表示) Nc. yadvadausadham A. yadva-
 dausadhan B. yadvadausadhat N_p. yadvadausadhan N_a. śadvadausadhan? N_x. yadvadausadhat
- 8) L. 'rtho na Ba. 'rthataś Ns. 'rthena Nc. 'rthena A. 'rthena B. 'thena N_p. 'rthena N_a. 'rthena N_x. 'rthena
 Nagao. 'rthataś

- 9) L. anartham (L ㄨㄣˊㄢㄢㄢ anarḥam) Ns. anartham or anarḥam Nc. anarḥam A. amarḥam ? B. anarḥa[m] N_ḅ. anarḥam N_A. anarḥam Nx. anarḥa[m]
- 10) L. anartha Ba. anarḥa Ns. anarḥa Nc. anarḥa ? A. anarḥa B. anarḥa N_ḅ. anarḥa N_A. anarḥa Nx. anarḥa Nagao. anarḥa
- 11) L. atra Ba. atra Ns. ㄢㄢㄢ (-tya□viprati-) Nc. ㄢㄢㄢ (-tyaviprati-) A. ㄢㄢㄢ (-tyaviprati-) B. ㄢㄢㄢ (-tyaviprati-) N_ḅ. ㄢㄢㄢ (-tyaviprati-) N_A. ㄢㄢㄢ (-tyaviprati-) Nx. ㄢㄢㄢ (-tyaviprati-)
- 12) L. āntarāyi Ba. āntarāyi Ns. āntarāyikas (nta ㄢㄢㄢ) Nc. ānta]rāyikas A. [anta]rāyikas B. [anta]rāyikas N_ḅ. [anta]rāyikas N_A. [anta]rāyikas Nx. [anta]rāyikas
- 13) L. bhayavat Ba. bhayavat Ns. bhayavat Nc. bhayavat A. bhayavat B. bhayavat N_ḅ. bhayavat N_A. bhayavat Nx. bhagavat Nagao. bha(n)gavat ? Tib. h̄jigs pa (Sk. bhaya)
- 14) L. mahāyānaḥ Ba. mahāyānaḥ Ns. mahāyāne Nc. mahāyāne A. mahāyāne B. mahāyāna N_ḅ. mahāyāne N_A. mahāyāne Nx. mahāyāne
- 15) L. bhāva Ba. bhāve Ns. bhāve Nc. bhāve A. bhāve B. bhāve N_ḅ. bhāve N_A. bhāve Nx. bhāve Ui. bhāve or bhāvam
- 16) L. dugḥam na bhastrayā Ba. dugḥam na bhastrāyāḥ Ns. dugḥam na bha□yāḥ Nc. durḡna pra- ? A. durḡna or durḡja B. dukḥam na N_ḅ. dugnam N_A. dugnam Nx. dugnam na bhanaḥyā .
- 17) L. ava Ba. eva Ns. eva Ui. eva